

世界文学を学ぶ会 第5回 ロシア文学紀行

6月4日(土) 午後1時30分～3時 アキシマエンシス校舎棟 201号室

『罪と罰』の舞台を訪ねて

サンクトペテルブルク

人間の行為の善悪について重い問いかけ

「一つの小さな罪悪は百の善行によってつぐなわれる」

「選ばれた非凡人は、世のため社会のためにそのお金を使うならば、社会的に無価値な人間を殺して金を奪うこともできる」

——主人公ラスコーリニコフの“殺人哲学”は不合理と不平等が消えていない現代社会でも共鳴する若者がいるかもしれません。



「・・・ことなく両手で斧を振り上げると、ほとんど努力もせず、ほとんど機械的に、脳天めがけて斧の峰を振り下ろした。まるで力が抜けたみたいなきらびだった。だが、いったん斧を打ち下ろすと、たちまちからだのなかに力が湧いてきた」(本文からの引用です)

『戦争と平和』の舞台を訪ねて

モスクワとヤースナヤポリャーナ

人生と歴史への無限の教訓



- I. 戦場で倒れたアンドレイが、空を見上げながら人生について思考をめぐらす情景
- II. ナポレオン軍に捕らえられたピエールが、流刑地のシベリアで農民カタラーエフとした語り
- III. 13歳で登場するナターシャの瑞々しさと恋に悩む姿。やがて結婚し子だくさんの良妻賢母になっていく経過
- IV. ナポレオンのモスクワ侵攻と炎上、そして冬将軍の中での絶望的な退却行
- V. 小説の各所で「戦争とは?」「平和とは?」「人生とは?」・・・人間社会の根源的な課題への言及(難解な大河小説のポイントを絞ってみました)



June bride in Russia (ロシアの6月の花嫁)

思いがけず遭遇した幸せなカップルたちの写真も多数ご紹介します



日本ペンクラブ会員 清水武 ホームページ: <http://donky.1a.coocan.jp/>

ロシア文学紀行 Power Point 原稿 2022.6. 4

タイトル

皆さま、こんにちは！ （下記に文学紀行で訪れた作品の順序を加える）

本日はお忙しいなかロシア文学についての講座にご参加くださいますようお願いいたします。

ロシアのウクライナ侵攻を契機に、この国についていろいろと語られるようになりまし。テレビには戦争の悲惨な状況が映りひどい政治の実態が伝わってきます。現在のロシアに対する反感を抱いていらっしゃる方も多いかと思えます。実は私もその一人でもあります。

なのに、なぜ今ロシアの文学を取り上げるのか。それは世界的文豪であるトルストイが、大著「戦争と平和」の中で戦争の本質と人間の生き方について深く語っているからです。そこで戦争というものの原点に戻り考えてみるヒントになれば、と思った次第です。

それにロシアを訪れたのが 6 月で「6 月の花嫁さん、ジュンブライド」に至る所で遭遇しました。その時の美しく楽しい写真をご紹介します、といった思いもありました。

更に、この機会に日本の、特に若い人に読まれているドストエフスキーの「罪と罰」も取り上げ、ロシアを代表する二人の作家の作品をご紹介しますことにした次第です。

<ここからパソコンを操作する関係で座って話しをさせていただきます>

今から 11 年前の 2011 年の 6 月、私は世界文学紀行の一環として、トルストイの「戦争と平和」とドストエフスキーの「罪と罰」の作品の舞台であるロシアを、友人のカメラマンと二人で訪れました。

その模様をこれから 100 枚余りの写真と併せて紹介してまいります。私流の解釈になりますが、わかりやすく楽しく、と思っております。順序は旅の行程にあわせて最初に「罪と罰」その後「戦争と平和」を取り上げてまいります。それぞれ 30 分くらいで計 1 時間、そのあと短時間の質問会・懇談会を予定しております。

<地図>2 枚

2011 年、11 年前のちょうど今頃です。6 月 14 日、成田を離陸したロシアのアエロフロート便は、途方もなく広いシベリアの上空を西に向かって飛んでいました。飛行機はちょうど 10 時間でモスクワ郊外のシェレメティョ国際空港に着陸。そこからすぐにサンクトペテルブルク行きの国内便に乗り換え、北に約 1 時間のフライトで最初の訪問地に到着しました。

なかなか沈まない窓の夕日 2 枚（以下、左端の数字は取材時の写真管理のもので原稿そのものには関係ありません）

0696 モスクワからのフライトの機中から見る空は、太陽が地平線上に残っていて周囲は金色に染まっていました。サンクトペテルブルクに着陸し空港を出たのは午後 11 時。ホテルに着いたのは 12 時過ぎでした。でも、外はまだ薄明るかった。“白夜”なのです。サンクトペテルブルクは北緯 59 度にあります。北半球の日照時間が最も長くなる夏至を前に、緯度の高い地域ではこうした現象が起きているのですね。

サンクトペテルブルク

0701 翌朝、ガイドの案内でさっそく街中に繰り出しました。街中に立つクトーゾフ将軍の像。ナポレオンの侵攻からロシアを救ったと言われる英雄であり、『戦争と平和』の物語の中にも老将軍として出てきます。

0714 サンクトペテルブルクはかつてのロシアの首都であり、ピョートル大帝による建都以来ロシア最大の文化都市として発展してきました。そのため、特に帝政時代にはこの都市を舞台に多くの文化人が活動し、詩や小説などの題材としても扱われてきました。ソビエト連邦（ソ連）の時代には「レニングラード」と呼ばれていました。街中は美しい運河が網の目のように流れていて、
“北のベニス”とも言われています。

ここでの主要な訪問場所は、まずはドストエフスキーの『罪と罰』の作品の舞台でした。――「一つの小さな罪悪は百の善行によってつぐなわれる」「選ばれた非凡人は、世のため社会のためにそのお金を使うならば、社会的に無価値な人間を殺して金を奪うこともできる」

――こんな“殺人哲学”を心に秘めた貧乏学生の主人公ラスコーリニコフは、奪った金で世のために善行をしようと企て、強欲な金貸しのアリョーナ婆さんとその妹を斧で殺してしまいました。

だがその直後から心の動揺は覆いがたく、発狂に近い状態になっていきます。追及する刑事と息詰まるようなやりとり。やがて売春婦ソーニャによって魂を救われ、最後には自首をしてシベリア流刑に服する――といった人間回復への強いヒューマンズムが描かれた小説です。

ここでストーリーの最初のさわりの部分を引用してみます：（いろいろな人が翻訳していますが、最もよく出来ていると言われる、元東京外国語大学の学長だった亀山郁夫氏の文からです）

――暑い7月初めの夕方、ラスコーリニコフは金貸しのアリョーナ婆さんの部屋に行く。殺人計画の最後の瀬踏（下調べ）みだった。

「距離はいくらもなかった。家の門から何歩かということも知っていた。ちょうど730歩だった」

「かれこれ11時近くだった。この時期にペテルブルグは、真っ暗な夜が訪れることはなかったが、それでも階段の上のほうはかなり暗かった」

「そこで、はっとわれに返った。<<あれの後だと！>>ラスコーリニコフは、ベンチから飛び上がりながら声をあげた。<<だが、はたしてあれをやるのか？ほんとうにやる気か？>>」

「<<ああ！>>と叫んだ。<<ほんとうに、ほんとうに斧をつかみ、あいつの頭をぶち割る気にいるのか、あいつの頭蓋骨を粉みじんにしてやるつもりなのか・・・なまあったかい、

べとつく血の海に足をすべらせながら、錠前をこわし、金品を盗み、ぶるぶる震えているのだろうか。体じゅう血まみれのまま、どこかに身を隠すのだろうか・・・斧を手にしたまま・・・ああ、ほんとうにその気なのか？>>そうつぶやきながら、木の葉のように震えていた」

ラスコーリニコフの心は動揺する。でも、彼の哲学に殉ずる友人の言葉に“あれの行為”への確信を深めていく。

「・・・もしかしたら、何十という家族を、貧困や、崩壊や、破滅や、墮落から救い出せるんだ。ばあさんのあの金があれば、それがぜんぶできる。・・・ひとつのちっぽけな犯罪は、何千という立派な行いでもって償えないもんかね。たったひとつの命とひきかえに、何千という命を救えるんだぜ。ひとつの死と、百の命をとりかえっこするんだ。・・・あのばあさん、有害だもんな。・・・」

(そして、いよいよ実行の場面です)

「彼は一心に斧に飛びつき、腰掛の下の、二本の薪の間におさまった斧を引きずり出した」

「・・・ことなく両手で斧を振り上げると、ほとんど努力もせず、ほとんど機械的に、脳天めがけて斧の峰を振り下ろした。まるで力が抜けたみたいなきもちだった。だが、いったん斧を打ち下ろすと、たちまちからだのなかに力が湧いてきた」

犯行後、ラスコーリニコフの心には思いもかけなかったさまざまな考えが浮かんできた。ともかく現場から逃げた。幸いに途中、誰にも顔を合わすことなく自宅のアパートにたどり着くことができた。

「窓際に走りよった。明るさは十分だった。すぐさま頭から足の先まで全身を見まわし、血の跡はないか、着ている服までくまなく調べ始めた」

(そして少しおいて)

「・・・どうしようもなく苦しみがつのってきた。<<なるほど、もうはじまっているのか、ほんとうにもう、罰がはじまっているってことか?・・・>>」

(と、自問が始まっていきます)

ここでスクリーンに戻りましょう。

私は登場人物のラスコーリニコフ、アリョーナ婆さん、売春婦ソーニャが住んでいたというアパート、それに作品中にときどき現れるセンナヤ広場、そして最後にドストエフスキー博物館を訪れました。

0726 **主人公ラスコーリニコフが住んでいたアパート**。彼は4階に住んでいたといいますが現在、部屋は解放されていない、とのことでした。

0728 建物の壁に刻まれていた標識です。約200年前に大洪水があったとき、サンクトペテルブルクの街も**ここまで水がついたという表示が記録**されていました。ちょうど11年前は日本でも3月に東日本に大地震と大津波があったばかりなので、なにか共通するような想いを抱いたものでした

0737 **街のあちこちにこうした花が美しく飾られています**

- 0738 ソーニヤが住んでいたという運河沿いにあるアパートです。どの部屋かは分かりません。
- 0743 ラスコリーニコフがよく訪れたというセンナヤ広場。車輪を活用したベンチがなぜか強いイメージを送り出しています。
- 0750 センナヤ広場の一角。テントを広げた果物屋さんですね。ここからあいにく小雨が降り出しました
- 0754 雨の中ラッキーなことにここから地下鉄に乗ることになりました。駅は地下深くエスカレーターも長さが 100 メートル近くあり、さらに美術館のように美しくなっています
- 0757 ロシアの地下鉄はとても地下が深い印象を受けました。これは戦時のための守備、避難にも使えるから、とのガイドの説明でした。今のロシアとウクライナの戦争でも同じ状況が起きていますね。つい先日、東京都も「万が一、外国から攻撃があったとき地下鉄を避難場所にしたい」との発表が小池都知事からありましたね。
- 0758 ここからドストエフスキーが最後に住んでいた家・博物館に入ります。入り口にあるドストエフスキーの彫像です。
- 0760 ドストエフスキーが使っていたという机。ここで『罪と罰』『カラマーゾフの兄弟』などの作品を次々と書いていったとのこと
- 0763 『罪と罰』のオリジナル原稿だと言います。
- 0774 博物館内に掲示されていた当時のサンクトペテルブルクの街の絵ですね
- 0775 //
- 0780 街の歩道に立つドストエフスキーの像。何か考え事をしているみたいなポーズですね。そして物語の終盤。ラスコーリニコフの魂は売春婦ソーニヤによって清められていきます。
- (ここからまた翻訳文の引用です)
- 「たんにシラミをつぶしただけじゃないか、ソーニヤ、なんの役にも立たない、けがらわしくて有害なシラミをさ」
- 「だいたい、ぼくはあのばあさんを殺したんだろうか？ ぼくは自分を殺したんだ、ばあさんじゃなかった！ あのとき、ぼくはほんとうにひと思いに自分を殺してしまった、永久に・・・あのばあさんを殺したのは悪魔で、ぼくじゃない・・・」
- (ソーニヤの言葉です)
- 「・・・いますぐ、いますぐ、十字路に行ってそこに立つの。そこにひざまずいて、あなたが汚した大地にキスをするの。それから、世界中に向かって、四方にお辞儀して、みんなに聞こえるように、『わたしは人殺しです！』って、こう言うの。そうすれば、神さまがもういちどあなたに命を授けてくださる・・・」
- 「ソーニヤを見つめながら彼は、自分に注がれている愛がどれほど大きなものかを感じることができた」。ソーニヤのすすめで自首したラスコーリニコフへの罰は、それまでの善行や自首したこと、取り調べの際の態度などを考慮し、シベリア流刑 8 年というゆるやかな刑になったのです。

舞台となったサンクトペテルブルクはかつて帝政ロシアの首都でした。ソ連時代にはレニングラードと改名され、再びサンクトペテルブルクへ。この間に、政治も社会体制も経済機構さえもすっかり変わってしまいました。でも、大きな石造りの家並みや道路、運河の陰影は歴史の変転に流されることなく今なお残っています。

今、社会における格差が問題視されています。なぜ自分は努力しても報われないのか、社会が不公平なのではないかと悩む人も多い。「罪と罰」は、現代の日本の社会にも通じるものがあるような気がします。「格差がもたらした犯罪」や「矛盾だらけの世の中への怒り」・・・作品が投げかけているテーマは、何世紀たっても変わることのない人間の本性と社会の矛盾をも突いているのではないのでしょうか。

本作は「罪を犯した人間でも更生できる」というテーマをあつかっています。「殺人」というもっとも重い罪を犯した人間でさえ復活できることを描くことで、読者に希望を与えたかったのでしょう。人間回復へのヒューマニズムが描かれた『罪と罰』は、いつの時代にも読者の魂を奥深いところで揺さぶっていくように私には思われるのです。

聞くところによると、特に大学の新生や会社の新入社員が読むように勧められ、これが研修の教材になっていることも多いようですね。

エルミタージュ美術館

ここで「罪と罰」の作品からは離れますが、サンクトペテルブルクを訪れる人で、エルミタージュ美術館を観光から外す人はいないでしょう。世界三大美術館の一つとして絶対的な評価を誇っています。ネバ川に沿うように長く荘厳に伸びています。カメラマンと二人で訪れました。

入場料は一人 400 ルーブル(当時約 1200 円：ウクライナ侵攻で交換レートが変わってきて今は何円になるのかは分かりません。それに撮影料として 200 ルーブル。フラッシュは許されていませんが、日本の美術書に出ているような作品を自分のカメラで撮影できるのはありがたいことでした。

館内は大変な数の見学者ですが、廊下や展示室の天井も高くゆったりとした造りのおかげでそんなに混雑は感じません。エカテリーナ女帝の“隠れ家”とも言われた宮殿の部屋の天井が金で塗られ、金色をふんだんに使った部屋（展示室）の華麗さと建物自体の壮観さが人気の秘密ではないかと思ったものです。

0785 エルミタージュ美術館の遠景

0787 美術館への入場を待つ見学者の列

0788 美術館内の入場券売り場

0790 美術館の入り口。さすがに女帝エカテリーナ 2 世の宮殿だっただけあって豪華を極めています

0797 部屋にはシャンデリアも飾られています

0800 美術館の部屋の一面はネバ川に面していて船の航行も覗き見ることができました

0802 休憩室的な部屋。かつてはここで舞踏会なども行われた。映画「戦争と平和」の中

でヒロインのナターシャがアンドレイ公爵と踊った時の舞踏会に使われた舞台ともなったとのこと。

- 0803 ナポレオン軍のロシア侵攻とロシア軍の大戦の模様を描いたものです
- 0804 戦争はどんな戦争でも悲惨さあまりありませんね。傷つく多くの兵士、やがて一般市民もその戦いの犠牲になっていく。現在のウクライナがこんな状況に陥っている
- 0807 美術館の出口近く。
- 0808 ネバ川側から見た美術館です
- 0815 サンクトペテルブルクの街でも最も交通が賑やかなネフスキー通り
- 0826 観光的にも有名なイサク聖堂です
- 0834 同行のカメラマンと街を散策していると、こんな光景が目にとまりました。私はカメラを手に現場に駆けつけてみると・・・
- 0839 現場ではあちこちで新婚カップルたちの記念撮影が行われていたのです。我々もその撮影班の一員に加わりました

以下、どこに行っても初々しいカップルに出会いカメラも向けてきましたが、文学紀行からそれていくのでこの数枚だけにして、モスクワ、ヤースナヤポリャーナでの写真も含めて最後に“ジュンブライド イン ロシア”とのタイトルでご紹介します。

- 0904 ネバ川にかかる橋。中型船まで橋の下を航行できるようになっています
- 0908 この日は午前中は雨でした。昼ころに雨は上がり向こうの空が灰色から 1 時間余りの間に真っ青な 6 月の空に変わっていききました
- 0917 運河の町の一隅。周囲の建物も運河と実によくマッチしています。“北のベニス”と言われるのもうなずける思いでした

モスクワへ

- 0924 サンクトペテルブルクから再びモスクワへ。シェレメティョ国際空港の玄関口。オリンピックの開催を機会にさすがによく整備されていったようです
- 0926 宿泊のホテル 11 階の部屋から見たモスクワの夜。12 時ともなるとさすがに白夜の明るさも消え、薄暗い雲間から月が地上を照らしていました

ヤースナヤポリャーナ

モスクワでの主要な訪問地はトルストイの『戦争と平和』の舞台でした。着いた翌日、まずトルストイが生まれ育ち『戦争と平和』『アンナカレーニナ』を執筆したトルストイの屋敷博物館へ足を伸ばしました。

モスクワから約 200 キロ南下したヤースナヤポリャーナ。片道 5 車線から 4 車線、そして 2 車線、やがて 1 車線となる比較的整備された道路を、チャーターした 4 人乗りのセダンでひた走りました。カメラマン、ロシア語通訳、私、それにドライバーです。

時速 110 キロを超えるスピード運転。それでも他車がどんどんと追い抜いていきます。道路の両サイドには白樺の林がどこまでも続いていました。その向こうにはまた林や牧草地が広がり緩やかな丘陵が続いている。いかにも映画で見たようなナポレオン軍が突然、飛び出してきそうな風情さえありました。

3 時間半のドライブで到着した「トルストイの屋敷博物館」は緑に囲まれた広大な敷地の中。白樺の並木、池、花園……。ここでも、結婚式を挙げてきたばかりの 10 組を超えるカップルが、屋敷内のあちこちで記念撮影をしていました。

- 0930 広大なトルストイの屋敷の入り口です。ロシア人としては愛嬌のよい番人が我々を迎えてくれました
- 0938 門をはいった直後にある小さな池（湖）は静かながら結構大きな広がりを見せています
- 0941 門から屋敷に通ずる白樺並木。日本の白樺より 5 メートルほど背が高いような気がします。新緑が最も美しい時でした
- 0958 世界的文豪トルストイが生まれ育ち、『戦争と平和』をはじめ「アンナカレーニナ」や『復活』などの作品をつむぎ出していった家です。現在は博物館になっていました。中にも入りましたが残念ながら内部の写真撮影は一切許されておらず、ご紹介できません
- 0984 生家からトルストイの墓まで 300 メートルほど森の中を歩きました。木漏れ日が初夏を彩っていました
森の中で芝生と草に覆われた質素なトルストイの墓です。トルストイは生前、「自分が死んだ後の墓はできるだけ質素に」と遺言したそうです。歴史に残る世界的な文豪にしてこのお墓。どこかの成金が自分の威光を示すためにキンキラキンの豪華な墓を作るのとは大きな違いですね
- 0968 トルストイの生家の広場で記念撮影をしているカップル。何人ものカメラマンや照明係に囲まれ楽しい光景が展開されていました。写真は後ほどまとめてご紹介します。
- 0994 屋敷は高校生や大学生の見学の場にもなっているようでした
- 1001 ゲートの横にあったトルストイの屋敷の図面です。ずいぶん広いのがわかります
- 1004 ヤースナヤポリャーナから戻った翌日の朝、宿泊のホテルから見たモスクワの空。青空に遊んでいる白い雲はのんびりでいいですね

上下 2 巻に及ぶ長編小説にはあらゆる哲学や思想、箴言が含まれていて、とても簡単に論ずることはできません。世界文学の世界最高峰と言われるほどの名作なのですが、とにかく長いことでも有名ですよ。日本語では 180 万字ほどになるという。「いつか読みたいと思いつつ、いつまでも読めない本、あるいは途中で挫折……」の代表的な存在なのではないでしょうか？

物語は 1805 年から 1813 年にかけてのナポレオンのロシア侵略から撤退までのヨーロッパの大動乱の時代が舞台になっています。登場人物の数は 500 人余り。ストーリー

が複雑に入りこんでいますが、大きな役割を担っているのは3人でしょう。

そのひとりがピエー。貴族の息子。お人好しで不器用。父親の急死により、莫大な遺産を相続します。急に大富豪になってしまったピエールは、何のために自分が生きているのか、その意味がわからずにいる。

もうひとりの主人公はアンドレイという男性。ピエールの数少ない親友で、勇敢な軍人ですが、名誉欲が強いタイプ。自分の名を世界にとどろかすことこそが生きがいだと思っ
ていましたが、挫折し、目標を見失ってしまう。

このふたりの男が、天真爛漫な少女、ナターシャに恋をします。そして3人は、ナポレオンとの戦争に巻き込まれていきますが、それぞれに成長を遂げ、生と死、そして愛の意味を知ることになっていくのです。

ここでは私がこの長編小説を今挙げた3人を柱に5項目に絞ってみました。

- VI. 戦場で倒れたアンドレイが、空を見上げながら人生について思考をめぐらす情景
- VII. ナポレオン軍に捕らえられたピエールが、流刑地のシベリアで農民カタラーエフとの語らい
- VIII. 13歳で登場するナターシャの瑞々しさと恋に悩む姿。やがて結婚し子だくさんの良妻賢母になっていく経過
- IX. ナポレオンのモスクワ侵攻と炎上、そして冬将軍の中での絶望的な退却行
- X. 小説の各所で「戦争とは?」「平和とは?」「人生とは?」「死とは?」・・・人間社会の根源的な課題への言及

以下、流れに沿って原作からそれらの箇所を、集英社版の世界文学全集 第20巻21巻 原久一郎（ひさいちろう）訳から一部だけ引用してみますと：

I ただ彼の上には高い空――晴れてこそいないが、高い空と悠々と過ぎゆく灰色の雲があるばかりであった。

「なんという静かな、平和な、崇高なことだろう・・・」

(戦争の悲惨と戦場の喧騒に対して、見上げた空のなんと高く悠長なことか。空を見上げているなかで、現実の世界も見下ろせるような境涯にもなっていくことが感じられます)

II ピエールはフランス軍の捕虜となり、貧しい農民兵カタラーエフと出会う。そしてカタラーエフの生き方を見て、これまでの自分の不幸は有り余る自由から生じていたことを知る。トルストイは「ロシア的で善良で円満なもの一切の権化として永久に残ったのである」としています。

III ナターシャが初めてのダンスを踊る、小さなレディ・・・

「アンドレイ公爵は、ナターシャの許婚者として、ロストフ伯爵家へ出入りするようになった」

「ナターシャは、注意深く相手の手をとると、その上に顔をかがめて、かすかに唇をつけて接吻し始めた。『おゆるしくださいませ!』……『僕はあなたを愛しています』とアンドレイは言った」……でもその後アンドレイは戦場で傷つきナターシャの看病を得ながら亡くなります。

「ナターシャはその後ピエールと結婚し、7年後には三人の女の子と一人の男の子を持っていた。……今度は自分の乳をやって、すべてが母親化していった……

(制作会社の異なる2本の映画で見たヒロイン・ナターシャは、どちらもはつらつといて瑞々しかった。翻訳者の解説によれば、「ある意味では、ナターシャは、トルストイの描いた女性の理想像と言えるだろう」としています)

IV (ナポレオンは50万の部隊でモスクワに侵攻しました)

「モスクワは空虚であった。そこはまだ以前の人口の50分の1ほど住民が残留していたけれど、しかしモスクワは空虚であった。女王のいない崩れかかった蜜蜂の巣が空であると同様、モスクワはまったく空虚だった」

「モスクワは住民に焼かれた——そこに残った住民ではなく、退去した住民によって焼かれたのである」

(ロシアの)クトーゾフ(将軍)は考えた。林檎は青いうちに採ってはいけない」

「攻勢に出れば負けるだけだということくらい、彼らも解しているはずだ。忍耐と時間——これが私の戦場の勇士だ!」と。

(事態は展開していきます)

「やがて、当時のクトーゾフさえ思いも及ばなかった、フランス軍の全滅へと至った」

クトーゾフの活動は、軍隊を抑制し、無益な正面攻撃や、迂回運動や、自滅しつつある敵との衝突を回避させたことであった。

(第三編でトルストイは戦争の勝利者と敗者について解説しています。フランス軍のモスクワ占領、その後、一戦もまじえずにフランス軍の潰走とは、歴史上のもっとも教訓的な現象の一つである。モスクワ近郊の百姓たちが、各自の乾し草をみんな焼き捨て、フランス軍に渡そうとしなかったからである。

「10月28日に霜が降り始めて以来、フランス軍の潰走はいよいよ悲劇的な性質を帯びてきた。兵士たちは凍え死んだり、焚火のそばで焼け死んだりしている。だのに皇帝や王や大公たちは、深々と毛皮の外套にくるまり、略奪した財宝を持って、幌馬車に乗ってゆくのだった。

彼らは軍のことを案じているようなふりをしてはいたけれど、その実、自分一個のこと——どうしたら少しも早く逃げ出して、身を全うすることができるかということ——だけしか考えなかった……」

(まさに戦争の不条理と人間の心の奥を描いています。私には、現在、ウクライナに侵攻しているロシア軍が、モスクワ侵攻で壊滅したナポレオン軍のようにも思えてくるのです。プーチンはなぜ自分の国の歴史に学ばなかったのか、と。)

V 「ねえ、あなた」とリーザは一人の將軍のほうへ顔を向けて語をついだ。「たくの主人はあたくしをすてて戦地へ行こうとしているんでございますの。あたくしをすてて戦地に死ににゆこうとしておりますの。ほんとに、何のためにこんなうとましい戦争などというものが行われるのか・・・」

(別の将校の言葉)

「・・・おれが目標なのかしらん？ おれのほうへ駆けてくるのだろうか？ 何のためだろう？ おれを殺しにか？ おれを、みんなから熱愛されているこのおれを？」

(幸福論では)

「自分の心の中に幸福をお求めなさい。幸福の泉は外部からではなく、内部にあるのですよ・・・」「幸福とは他人のために生きることにある」等々。

(そして綴っています)

やがて黒雲が集まりだし、死骸や負傷者の上、怯えた者や疲れ果てた者や、ためらっている者の上に、小雨がしとしと降り始めた。「おい人間ども、もうたくさんだ、たくさんだ！やめてくれ・・・いい加減正気に返ったらどうだ！お前たちは一体何をしているのだ？」。こう言っているかのようであった。

(第四編では、戦争、殺し合いの不条理、生死について解説をしています。日常の世界で人を一人殺せば犯罪です。でも戦争では大勢の敵(人間)を殺すほど英雄になる。トルストイは、文明というものが進めば進むほど、むしろ人間生活をゆがめ、魂の生活を損ねるものだという結論を抱くようになった。昨今の時代状況と人間自身の幸せについて思うと、私も心から同感する一人です。科学文明が進歩しても人間自身は進歩していない。人類が滅亡するかもしれない核の拡散におびえ、IT が進歩してもそれを使いこなせない悩み、等々。「貧しく不便だったけれど子供のころの社会の方が人情があり心が豊かであった・・・なんて。大学に IT 関連の学科ばかり増えて哲学科が無くなりつつある、というのも気になるところです)

ナポレオン侵攻の跡地に立って

『戦争と平和』の舞台はあちこちに広がっていますが、中心はモスクワとサンクトペテルブルク。後半のクライマックスはナポレオンのモスクワ侵攻と退却です。そんな小説の流れと史実を押さえながら、翌日はモスクワ市内を散策しました。

まずはモスクワの顔「赤の広場」と「クレムリン」。続いてトルストイ博物館、モスクワ大学、雀が丘、そして最後にモスクワ川クルーズで街の表情をカメラに収めてきました。

1007 有名なボリショイ劇場の正面玄関。時間もお金のゆとりもなく残念ながら舞台を鑑賞するチャンスはありませんでした

1019 ロシアの中心「赤の広場」に入っていく門。地方からのおのぼりさんとモスクワを訪れた外国人でいつも賑わっています

1020 大道芸人が子供たちと一緒にポーズを観光客のカメラの後ろから撮影

1025 観光客が買い物に訪れる赤の広場の片面にある Gum 百貨店。モスクワの物価は世界

一に近いほど高かったですよ

- 1032 政治権力の中枢クレムリン宮殿の建物。ソ連時代にはこの前の「赤の広場」を戦車から大陸間弾道弾まで兵器のパレードがあったものです。皆さんもテレビか新聞報道でよくご覧になったことがあると思います。ちょうど今の北朝鮮みたいだったですよ。つい先日、プーチン下でも同じようなパレードがありましたね。
- 1035 「赤の広場」の一角にあるワシリー寺院。共産主義国家であったソ連も宗教を完全には閉め出さなかった。どんな社会体制にあっても人間にとって宗教のもつ重さ大切さが伝わってきますね
- 1038 「赤の広場」の一角にそびえる時計の塔。歴史の変遷を見つめてきたでしょうね
<広場のあちこちで記念写真を撮っています>
- 1043 「赤の広場」をできるだけ広く撮った写真です。この広場を戦車やロケットを乗せた車がパレードしたわけです
- 1047 グム百貨店を別の角度から眺めた写真です
- 1049 広場の出口にある土産品売り場。毛皮の帽子や、中に同じ形の人形がいくつも入っているマトリョーシカなど、いかにもロシアらしい土産品が並んでいます
- 1054 マトリョーシカ、それに英語の文字の入った野球帽もあり面白いですね
- 1059 アメリカのオバマ大統領がモスクワを訪れた際に泊ったというホテル。赤の広場から 300 メートルほどの距離感でした
- 1065 モスクワ市内にあるトルストイ博物館の入り口にある掲示板
- 1067 博物館の入り口にあるトルストイの胸像。ひげとオレンジ色の激しさが文豪の魂を宿しているようでした
- 1075 トルストイの所持品やオリジナルの原稿 2 枚
- 1091 トルストイと夫人の写真
- 1096 博物館の中に講演やプレゼンテーションをする場として、いす席も用意されていました
- 1102 『戦争と平和』のオリジナル原稿と校正原稿
- 1104 博物館にはナポレオンを迎え撃つための作戦会議の絵もありました。映画のシーンに似ていましたね
- 1114 トルストイは当時の多くの著名人と交流があった。その時の手紙の数々です
- 1122 多くの作品をたたき出したタイプライター
- 1129 博物館の出口にあるトルストイの像。渋い感じですね
- 1132 建物を出るとその前の庭にはトルストイの石像がたっていました。なんとなくメタボ。シェイプアップが必要なような体形ですね

モスクワ大学

- 1153 モスクワ大学の本部塔です。学問の象徴とともに私には権威の象徴のようにも思えました
- 1154 大学の遠景。手前に立つのは大学の創立者の像です
- 1168 正面玄関の前は長方形の池と噴水があって学生たちの憩いの場ともなっているよう

でした

1171 大学のすぐ前の道路を挟んで広がるお花畑。学生たちの憩いには役立っているようです

<花嫁の写真 1枚>

1192 大学から500メートルほど歩くと「雀ガ丘」という高台につきます。

1196 観光客の集まるところにはお土産店が集まる。雀ガ丘の広場には100件を超えるお土産屋さんが競うように並んでいました

1203 雀ガ丘から望んだモスクワの遠景です。ここからはモスクワ市の大部分を望むことができます。モスクワに侵攻したナポレオンもこの丘に立って作戦を練ったといえます。

モスクワ川クルーズ

1230 私たちもモスクワ川の観光船に乗りました

1231 クルーズ船から見たクレムリン宮殿。建物の裏側にあたります。チョコレート色の塔はクレムリン周辺を警備する望楼。ロシア帝国から共産革命、ソ連の台頭、そしてまたロシアへと、政治的変遷のいろんなシーンを見てきたのでしょうか

1238 ロシアではモスクワ大学に似た建物がよくあります。スターリングゴチック建築というのだそうですが、特徴はできるだけ高く空に伸びようとするのだそうです

最後に (ロシアを救った海の英雄の像)

<以上ですが、最後にここで出会った新婚カップルの写真のみまとめて上映します。計20枚です>

ロシア文学の旅では、行く先々で新婚カップルの初々しい場面にぶつかりました。ロシアには「ジューンブライド」の慣習はないといいますが、でも、太陽が輝き緑が最も美しい6月は新生活のスタートに最適なのかもしれません。

約1週間の滞在で出会ったカップルは20組を超えました。白いベールに純白のウェディングドレスの花嫁たちは木々の緑に映えて美しく輝いていました。

彼らは仲間に取り囲まれて記念撮影をしていました。私たちもその“撮影班”に加わったのです。おめでたい席。断わられるようなこともありませんでした。

「シャスリーバ！（お幸せに！）」

同行の通訳から教わったお祝いの言葉を投げかけると、ニコっとほほ笑んで応えてくれる花嫁もいました。

仲間たちが囃（はや）したてます。「ゴーリカ！」「ゴーリカ！」

「ゴーリカ」とはロシア語で「苦（にが）い」との意味。つまり「苦いからもっと甘いところを見せてくれ！」との呼びかけだといえます。そんな声がかかると、カップルはひしと抱き合い熱くながーいキスを何回も繰り返したのです。

周囲は「アジン(1)・ドヴァー(2)・トゥリー(3)！」とその長さをカウント。それを“撮影班”がカメラに収める。私たちもその後列に加わったのです。

少々お堅い文学作品の取材旅に思いがけずも心温まる光景をプレゼントしてくれたので

した。

- 111 結婚式を終わったばかりに関係者で記念撮影をしているようですね
112 式を挙げた教会をバックに日本で言う仲人と一緒にパチリ
113 さあ、これから二人だけの旅が始まるよー
114 夢心地になって運河に落ちないでね
115 このポーズでいいかしら
116 親戚が集まり新生活に旅立つ二人を祝福
117 ヨイショ！「あなた、私を落とさないでネ！」。花婿は力持ちでなければいけません。
118 「バンザイ」でいいのかな？仲間の出発を祝ってみんなでハイジャンプ！
119 「もう死ぬまでキミを離さない」と言ったかどうか・・・
120 ここはトルストイの館ですよ！ そんなこと二人の愛には関係ありません。
123 「さあ、大好きなあなたの顔に私の唇からシャボン玉が飛んでいくわよ」
124 「こんな感じでいいかしら？」。カメラで覗くカメラマンのお尻に注意！
126 「早くチューして！」「キミは本当に美しいよ」
127 「キミに捧げる花束をどうぞ」。モスクワ大学前の森の一角でのシーンです。花婿の純朴さと白い花嫁の美しさが際立っています。以前に昭島市の写真展にも応募した作品です。
128 新婚旅行に行く車もいかにも「新婚ホヤホヤ」な感じに飾られています。
129 モスクワの雀が丘での記念撮影中のカット。新郎は全盲で花嫁は弱視。祝福する周りの仲間も大部分が視力に問題を持っている人々とのことでした。どんな社会体制にあっても、お互いの理解と支え合いがあればこそ！人生のスタートは同じです。

以上で、「罪と罰」「戦争と平和」についての私の話を終わらせていただきます。

長時間のご静聴ありがとうございました。